ご覧になりたい作品をクリックしてください

目次

	題名	対象	内容項目※	【資料編】	【活用編】
1	ぼくにできること	（小学校低学年）	1－(1)	1	27
2	だいじなおかしも	（小学校低学年）	4－(1)	3	28
3	スーパーの店先で	（小学校中学年）	2－(2)	5	29
4	おにぎりとおみそしる	（小学校中学年）	2－(4)	7	30
5	凛ちゃんの願い	（小学校中学年）	3－(1)	9	31
6	こいのぼりに思いをこめて	（小学校高学年）	2－(2)	11	32
7	思いをのせたランドセル	（小学校高学年）	2－(2)	13	33
8	命、今生きていること	（中学校・高校）	3－(1)	15	34
9	メリー・ウィドウ・セレクション	（中学校・高校）	2－(6)	17	35
10	語り継がれる教訓	（中学校・高校）	3－(1)	19	36
11	極限の救出劇	（中学校・高校）	3－(1)	21	37
12	天使の声	（中学校・高校）	3－(3)	23	38
☆	川内優輝さんからのメッセージ			25	
☆	日本に届け、この思い！ ～世界中からの応援メッセージ～			26	

※の数字は、小・中学校学習指導要領で示されている道徳教育の内容を示している。

1　ぼくにできること

おかあさんとおひるごはんをたべていると、とつぜん、じしんがおきました。

「おかあさん、こわいよ。」

「だいじょうぶよ。おちついて。」

ぼくとおかあさんは、テーブルの下にもぐり、じしんのゆれがおさまるのをまちました。

いまのじしんで、水どうの水がでなくなってしまいました。

「こまったなあ。どうしよう。」

しばらくすると、水どうのじゃぐちから、水がではじめました。

「ああ、よかった。」

ぼくは、あんしんしました。でも、水がなくなったらどうなってしまうのか、とてもしんぱいになりました。

「おとうさんとおにいちゃんは、だいじょうぶかしら。」

おかあさんが、しんぱいしています。

「おとうさんとおにいちゃんは、出かけているけど、みんなが出かけているときに大きなじしんがおきたら、どうしたらいいの。」

ぼくは、おかあさんにきいてみました。

「そうね。そんなときのこともかんがえて、みんなできめておかなくてはいけないことがあるわね。」

おかあさんも、かんがえはじめました。

夕がたになりました。おとうさんもおにいちゃんもおうちにかえってきました。

「きょうのじしんは大きかったね。おとうさんは、なにをしていたの。」

「おとうさんは、車をうんてんしていたよ。大きなゆれをかんじたので、車をとめて、ラジオをつけて、じしんのことをきいたよ。」

「おにいちゃんは、なにをしていたの。」

「ぼくは、ともだちと、ひろばでサッカーをしてあそんでいたよ。ゆれたのがわかったから、みんなでたてものからはなれて、ひろばのまん中にあつまったよ。」

「えらかったね。」

おかあさんは、じぶんでかんがえて、こうどうしたおにいちゃんをほめていました。

夕ごはんのじかんになりました。じしんがおきたときにはどうすればよいか、かぞくでどのようなことをきめておくとよいか、みんなでかんがえることにしました。

目次に戻る

2　だいじなおかしも

二じかん目のじゅぎょうがおわりました。校ていに出たけんくんたちは、いつものドッジボールをはじめました。こうたくんのなげたボールは、いきおいよくコートのそとにとんでいきました。ゆうかさんがボールをおいかけていると、ほうそうのチャイムがなりました。

「これから、ひなんくんれんをはじめます。」

きょうとう先生のこえです。

「ドッジボール、やりたあい。」

けんくんにつられて、こうたくんもいいました。

「みんなが校ていに出てくるね。それまでちょっとだけやろうよ。」

「だけど、ひなんくんれんだよ。」

ゆうかさんは、こまってしまい、かかえていたボールをこうたくんにわたしました。

きょうとう先生のほうそうがつづきます。いつもよりこわいこえにきこえます。

「じしんです。きょうしつにいる子は、つくえの下にもぐりなさい。校ていにいる子は、まん中にあつまって、すわりなさい。」

ゆうかさんは、校ていのまん中にむかいました。しかたなくけんくんたちもついていきました。

でも、けんくんは、ボールをさわっているこうたくんとおしゃべりをしています。

「休みじかんにひなんくんれんだなんて、ついてないね。」

「なんだかそんをした気ぶんだよ。」

すると、校ていにいる先生に、

「おしゃべりをやめなさい。みんながそろうのをだまってまちます。」

と、ちゅういされてしまいました。

そのうち、きょうしつにいた子どもたちが、先生について出てきました。みんなはだまって

います。

一年生から六年生まで、ぜんいんが校ていにあつまると、校ちょう先生からあいことばおかしものおはなしがありました。

「バラバラなばしょからひなんできましたね。けれども、しのじをまもれない子がいましたよ。ざんねんです。みんながたすかるためには、一人一人がくんれんをきちんとやらなければいけませんね。」

けんくんは、じぶんのたいどがどうだったのか、かんがえてしまいました。

三月十一日、きょうしつでかえりのかいをしていると、とつぜんつくえが大きくうごきだしました。

じしんです。けんくんは、くんれんのときのこうちょう先生のおはなしをおもい出しました。なきたい気もちをがまんして、先生について校ていにむかいました。

ぜんいんがあつまると、校ちょう先生から、おはなしがありました。

「だれにも、けがはありませんでした。みんなしっかりとおかしものあいことばをまもりましたね。」

そのよる、テレビのニュースを見てびっくりしました。ひるまのじしんは、ひがしにほん大しんさいという大きな大きなひがいをおこしたじしんでした。

ひなんのあいことば

おさない
かけない
しゃべらない
もどらない

目次に戻る

3　スーパーの店先で

お母さんといっしょに買い物に行くとちゅう、駅のかいさつを出て、階だんを下りようとしていた時、

「じしんによるひさい者のためにぼ金をお願いします。」

と、ぼ金活動をしている人たちがいました。

お母さんに、

「元気くん、ぼ金をしてきたら。」

と言われましたが、ぼくは、

「みんなが見ているし、はずかしいからいやだよ。」

と言って、急いで階だんを下りてきてしまいました。

帰り道、お母さんから、

「何でぼ金をしなかったの。」

と言われても、何も答えられませんでした。

次の日曜日の朝、お母さんから、

「今日はスーパーで、ミネラルウォーターが一人二本買えるから買ってきてくれる。」

と、たのまれました。

あのしんさいの後、ミネラルウォーターがすぐに売り切れてしまいます。早く行かないと、また売り切れてしまうと思い、ぼくは急いで自転車に乗り、スーパーに向かいました。

ミネラルウォーターの売り場に近づくと、とつぜん、

「何でだめなんだ。」

という大きな声が聞こえてきました。見ると、七十さいくらいの男の人が、お店の人につめよっているところでした。

男の人は、

「親せきが、つ波でひ害を受けて、気仙沼のひなん所にいるんだよ。でも、飲む水がなくてこまっていると、さっき連らくがあって、何とか飲み水をとどけてほしいとたのまれたんだよ。だから、少しでもたくさんの水を持って行ってあげたいんだ。わかってくれよ。ぜひ、二本と言わずにもっと買わせてくれよ。」

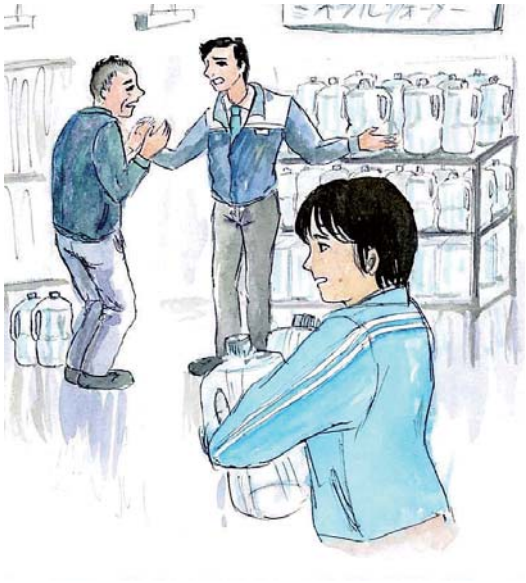
と真けんにたのんでいました。

お店の人は、
「お気持ちはわかりますが、お客様だけ特別にするわけにはいかないのです。わかってください。」
と答えていました。

その後も、
「何とかたのむよ。これからひなん所に行くのに、ぜひ、水をとどけたいんだよ。」
と、うったえていました。

結局、男の人の願いはかないませんでした。

水を二本だけ手にして、かたを落としてレジに向かう男の人の後ろすがたを見て、何だかかわいそうに思えてきました。



ぼくは、手にした二本のミネラルウォーターを、じっと見つめていました。

ぼくは急いでレジに向かい、お金をはらうと、男の人の後を追いかけました。

ちゅう車場にいた男の人を見つけ、
「おじさん、ぼくのこの二本もひなん所の人にとどけてください。お願いします。」
と、ミネラルウォーターを差し出しました。

男の人はびっくりしたようでしたが、二本のミネラルウォーターを受け取ると、ぼくの手をしっかりとにぎり、
「ありがとう、ありがとう。」
と何度も頭を下げて喜んでくれました。

ぼくは、男の人の車を見送りながら、何だか気持ちがほかほかとしてきて、うれしくなりました。

目次に戻る

4　おにぎりとおみそしる

小さな白いおにぎりと具のないおみそしる。これは、わたしにとって、わすれる事のできないごはんです。

わたしは、東日本大しんさいで、自分の家にいられなくなり、ひなん所で生活していました。その時の食事の内ようです。

それまでのわたしは、おやつを食べて、食事の時は、デザートまでありました。それが、あたり前だと思っていました。

とつぜんのさいがいを受け、ひなん所で生活をしてみて、わたしが食べていたものが、とてもめぐまれていた事に気がつきました。何日間も、おにぎりとおみそしるだけを食べていましたが、ふしぎとあれが食べたい、これが食べたいとは、思いませんでした。おなかがすいて、食べる事ができることだけで、うれしかったからです。

白いおにぎりから、中に梅干しが入ったおにぎりになった時は、とてもうれしかったです。

ひなん所から、東京にいどうした時に、はじめて、おかずのついたごはんを食べました。弟が大好きな野菜を見て、

「食べていいの。」

と聞きながら食べていました。とても、うれしそうでした。

今もまだ、自分の家には帰れないけれど、テーブルには、わたしの好きな食べ物がたくさんならびます。季節のフルーツも食べられるようになりました。ひなん所で、テーブルもなくて、おふとんをかたづけて、下を向いて食べた小さなおにぎりと具のないおみそしるの味は、ぜっ対にわすれません。こまっているわたし達にごはんを作ってくれた人達の事もわすれません。

ひなん所にいた時は、あまりわらう事ができませんでした。でも、今は、わらってごはんを食べています。つらい事やこわい事もたくさんありました。今は、ごはんを食べて、おふろに入って、おふとんにねられる事がとてもうれしいし、幸せです。

これからも、食べ物をそまつにしないで、楽しくごはんを食べていきたいと思います。

（児童の作文より）

目次に戻る

5　凛ちゃんの願い

凛ちゃんは、明るく活発でがんばりやの女の子です。お父さんの転きんで、春休みに宮城県仙台市から埼玉県に引っ越してきました。

しかし、転校してからの凛ちゃんはあまり元気がありません。大すきな勉強の時間も、仲良しの友達と遊んでいる休み時間も、うかない顔をして、いつもの凛ちゃんらしくないすがたが見られます。そのわけは、転校してくる前にいた仙台の小学校でこんなつらい体験をしたからなのです。

三月十一日午後二時四十六分、宮城県おきで、とつぜん大きな地しんが起こりました。

この日、凛ちゃんは、学校でろう下のそうじをしていました。「ドドーッ」という大きな音とともに、校しゃがはげしくゆれ、動くこともできず、物がたおれる音や、友だちが泣きさけぶ声が聞こえ、とてもこわくなりました。凛ちゃんは教室にもどり、先生の指じで校庭にひなんしようとしましたが、ろう下や通路は、くつ箱やロッカーなどがたおれて歩くことができませんでした。そこで、やっとの思いで窓からひなんしました。この日は校しゃがこわれてきけんなために、そのままほごしゃへの引きわたしで下校になりました。

この大しんさいで、凛ちゃんの家族は無事でしたが、お母さんはとても悲しそうな顔をしていました。そして、お母さんは、凛ちゃんに話し始めました。それは、初めてのひ孫である凛ちゃんをとてもかわいがってくれた、ひいおじいちゃんのことでした。

ひいおじいちゃんは、地しんでこわれた家の戸をしゅう理しようと、物置に道具を取りに行ったときに、とつぜん津波におそわれました。最初の津波は高い波ではありませんでしたが、ひいおじいちゃんはおどろいてその場に立ちすくんでしまい、すぐ先にあるえん側までたどり着くことができませんでした。そして次の大きな津波にあっという間にのみこまれてしまいました。その津波は、家の天じょうあたりまでおしよせ、あたりは大量の流木と油とヘドロで真っ黒な海に変わりました。

やっとの思いで二階にひなんしたひいおばあちゃんは、材木につかまってうかんでいるひいおじいちゃんに、近く

にあったカサを持って思い切り手を伸ばして助けようとしました。

「じいちゃん、これにつかまれ。じいちゃん、じいちゃん・・・。」

ひっ死にさけぶひいおばあちゃんの目の前で、大きな黒い波がひいおじいちゃんをのみこんでしまいました。

悪夢のような一夜が明け、二階にひなんしていたひいおばあちゃんは、よく朝、自えい隊員に救助されて無事でした。しかし、ひいおじいちゃんは、津波が引いた庭の松の木の横で冷たくなってたおれていました。その松の木は、ひいおじいちゃんがとても大切に手入れをしていたじまんの松の木でした。ひいおばあちゃんは、ひいおじいちゃんの体に手を合わせて、

「じいちゃんすまなかったな・・・助けてやれなくて。自分だけ助かっちまって・・・ゆるしてけろな。」

と、なきながらあやまり、今までのお礼を伝えました。

お母さんの話を真けんに聞いていた凛ちゃんは、悲しみでむねがいっぱいになりました。そして、いつも習字をほめてくれたこと、温せんに行ったことなどひいおじいちゃんとの楽しかった思い出がうかんできました。

おそう式の時、おかんの中でねむるひいおじいちゃんを見ると、なみだがとまりませんでした。そして、おかんの中に習字とお手紙を入れてさいごのお別れをしました。習字には、ひいおじいちゃんがかわいがっていた「ねこ」という文字を書きました。

二学期に入り、凛ちゃんは新しい学校にもなれてきました。ときどき、ひいおじいちゃんのことを思い出しますが、やっといつもの凛ちゃんらしさがもどってきました。

それは、大好きだったひいおじいちゃんが、天国で凛ちゃんを応援してくれているからです。凛ちゃんは、今日も天国にいるひいおじいちゃんに届くように、いっしょうけんめい勉強したり、元気に友だちとすごしています。

そして、ひいおばあちゃんには、ひいおじいちゃんの分まで長生きしてほしいと願っています。

目次に戻る

6　こいのぼりに思いをこめて

三月十一日、あの大地震は起きた。「ドドドドー」という音とともに揺れた教室。大輔たちは恐ろしさにふるえていた。

家に帰ると、家族の顔が見られてとても安心した。安心したのもつかの間、テレビの画面を見た瞬間、言葉を失った。津波だ。ものすごい量のにごった水の中を家や車が流されていた。漁をする船も流され、高波が魚市場にも襲いかかっていた。それを見て、お母さんが、

「大輔が山村留学でお世話になった田野畑村の人たちは、大丈夫かしら。田野畑小学校の子どもたちは・・・。」

と心配そうに言った。お母さんの言葉を聞いて、大輔は不安になった。

田野畑村は、岩手県宮古市の北部にあり、大輔が住む埼玉県深谷市と友好都市である。毎年、夏休みに小学生が宿泊を共にする交流をしている。昨年は、大輔たちが、深谷市から田野畑村へ、今年は、田野畑村の小学生が、深谷市へ来ることになっている。

大輔は、昨年、海に面して建つ施設に田野畑小学校の友達と一緒に宿泊した。切り立った断がいの間から昇る朝日は、すばらしかった。そのうち、朝日を背に、ウニ漁を終えた漁船が次々と港に帰ってきた。大輔たちに、漁師さんが、

「埼玉の深谷から来たんかい。」

と言って、採ってきたばかりのウニをパカッと割って、食べさせてくれた。甘くて何とも言えない海の味がした。

田野畑小学校の友だちと共に過ごした五日間。別れの日、「来年、深谷で会おうね。」「元気でね。」と約束して帰ってきたのだ。

学校へ行くと、先生が、地図を指しながら、

「今回の大地震と津波で、田野畑村も大災害を受けました。山村留学の時に宿泊した施設は、四階まで津波が襲いかかったそうです。亡くなった人や安否がわからない人もたくさんいらっしゃるようです・・・。」

と話してくださった。

先生の話を聞きながら、大輔は、切り立った断がいや美しい海、共に過ごした友だちや親切にお世話してくださった村の人のことを思い浮かべていた。そして、「何かぼくにできることはないかな。」と考えた。

さらに、先生は、

「深谷市では、募金をしたりこいのぼりに応援メッセージを書いたりして、田野畑村の人たちを応援するそうです。」

と言葉を続けられた。

大輔は、学校で、大災害を受けた田野畑村の人たちを思い、まず募金に協力した。募金をすると、少しは力になれたかな、と思い、何だか心がすっきりした。

それから大輔は、自分の思いを直接届けたいと思い、こいのぼりに心をこめて応援メッセージを書くことにした。そして、こいのぼりが置いてある体育館へ行った。体育館には、メッセージが書きこまれた赤や青や黒のこいのぼりが並んでいた。大輔は、田野畑小学校の友だちを元気づけたいと思い、赤い大きなこいのぼりを選んだ。

こいのぼりには、すでに多くの人のメッセージが書きこまれてあった。

「がんばれ、田野畑村！」「ファイト！遠く離れていても心はひとつ」などのメッセージの中に、昨年、大輔たちを引率してくださった加藤先生のメッセージが目に入った。先生は、

「昨年の夏は、大変お世話になりました。元気でかわいい子どもたち、あたたかくて優しい先生方のお姿が目に浮かびます。一日も早い復興をお祈りしています。今年の夏は、深谷でお待ちしています。」

と書かれていた。大輔は先生の隣に、

「皆さんと一緒に見た朝日を思い出しています。田野畑のウニ、大好きでした。また食べに行きたいです。このこいのぼりは、向かい風にきっと元気よく泳ぐと思っています。がんばれ！」

と、ていねいにメッセージを書いた。

夕ご飯のとき、お母さんが、

「今日、公民館へ行ったとき、こいのぼりに応援メッセージを書いてきたよ。」

と言った。中学生の兄も学校で書いたという。

大輔は、温かい気持ちになり、今年、ぜひ深谷で会いたいと思った。

田野畑村へ届けられた百ぴきのこいのぼり。六千人の熱い応援メッセージが込められている。四月二十九日、そのうちの五十五ひきが、田野畑小学校で元気よく泳ぎ始めたそうだ。向かい風が強ければ強いほど、たくましく泳ぐこいのぼり。田野畑小学校から届いたビデオレターから、そのこいのぼりの下を笑顔で走る、元気な子どもたちの姿が、大輔の目に飛びこんできた。

目次に戻る

7　思いをのせたランドセル

グラ、グラ！

「地震よ！　昌平。ストーブの火をすぐに消してちょうだい。」

「消したよ。お母さんも早くこっちへ！」

昌平とお母さんは、急いでダイニングテーブルの下にもぐり、頭をかかえ、身を小さくしました。

しばらくして、ゆれもおさまりました。

「ぼく、念のためにブレーカーのスイッチを切っておくよ。」

「ありがとう。昌平も、すっかりお父さんみたいにたのもしくなったわね。」

そう言いながら、お母さんは、避難ぶくろを確認し始めました。

「あの三月十一日の大きな地震から、まだ何日もたっていないせいか、余震が続くわね。ところで、震災にあってしまった子どもたちのために、何かできないかしら・・・。だって、学用品なんかもいっさいなくなっているのよ。昌平と同じように、卒業を間近にひかえた子どもたちはどうするんでしょうね。」

昌平とお母さんは、まだ少しゆれる天井の蛍光灯のひもを見つめていました。

次の日、昌平のクラスでは、朝の会で担任の先生が、

「私たちが住んでいるこの町にも、震災から避難されたご家族を受け入れるそうです。この学校にも転校生が来るかもしれませんね。」

と、おっしゃいました。

その日の夕ご飯時、ニュース番組では、「東日本大震災関連情報」が、ひっきりなしに流れていました。その中に、避難された方を受け入れた町の様子もありました。

「お父さん、ぼくの町も、避難された方を受け入れるんだって。だから転校生がぼくの学校にもやってくるかもしれないんだ。」

「ほう、それは大切なことだね。日本中でこの震災に向き合わなくちゃあね。昌平、お前もできることを見つけて、やってみるといいよ。」

と言ったお父さんの一言が胸に響き渡りました。

卒業式を迎えた最後のお話朝会で、校長先生が、

「これからも学校生活に夢がもてるという幸せを十分にかみしめるとともに、三月十一日に発生した東日本大震災で被災された地域の皆さんの悲しみや苦しみを自分のこととして考えてみましょう。そして、何か役に立てないかと思いながら、今できること、やらなければならないことをしっかりと考えて生活していきましょう。」

と、お話しされました。

その日、昌平は、学校が終わっても、校長先生の言葉が気になってしかたがありません。友達からの遊びのさそいを断って、突然背中を押されたように、大急ぎで家に帰りました。

「おかあさん、お父さんの革ぐつのクリーナーってどこにあるの。」

「くつ箱のすみにあるでしょ。何するの。」

夜の九時、昌平の部屋の明かりが消えません。

「昌平、何しているの。早く寝ないと、かぜをひくわよ。」

「だいじょうぶだよ。ぼくにできることをやっているの。」

「何？　昌平にできることって。明日も早いんだから早く寝なさい。」

昌平は、自分といっしょに卒業する自分のランドセルをみがいていたのです。

昌平のランドセルは、亡くなったおじいちゃんが小学校入学のお祝いにプレゼントしてくれたものでした。そして、小学校生活の思い出がいっぱいつまったランドセルです。

（ぼくのランドセルを、もう一度新しい友達に背負ってもらおう。）

見違えるように光ったランドセルに、昌平の思いと額の汗が写っています。

お母さんがきれいにラッピングしてくれたランドセルを抱え、今、昌平は校長室のドアの前に立っています。

目次に戻る

8　命、今生きていること

本当の幸せというものは、実は、自分の一番身近なところにある、ということを、東日本大震災を通して知りました。それは、あたりまえだけど、お金では買えないもの、「生きている」ということです。

ぼくは、四月から埼玉県の中学校に転校してきました。それまでは、福島県の浪江町（なみえまち）というところで、ごく普通の小学生として、毎日を送っていました。そう、あの日までは・・・。

三月十一日、あの大地震は起きました。そのとき、ぼくは帰りの会をしているところでした。机の下にかくれました。ものすごいゆれでした。震度六強などという地震は初めてで、そのあと、津波警報が発令されました。

ぼくたちは、下級生を連れて、近くの小高い山まで避難しました。後ろをふりむくと、遠くの方に大きな波が見えてきました。それは、黒い壁のようで、一体何が起こっているのかもわからず、恐怖だけが自分を支配していきました。ぼくたちは、ひたすら山の中を歩き、通りかかったトラックに乗せられて避難所まで行きました。

ぼくの住んでいた町は、津波にのまれ、大切な家、大切な家族、大切な愛犬・・・みんな一瞬に消えてしまいました。そして、ぼくのおばあちゃんは、二度と帰ってきませんでした。おばあちゃんとの思い出は、数え切れないほどあります。

ぼくのおばあちゃんは、年をとっていたけれど、ぼくに負けないくらい元気でした。毎朝、ぼくが学校に行くのを見守っていてくれていて、毎日、畑で野菜を育てていました。ぼくが学校から帰ってくると、おいしいご飯を作って待っていてくれました。ぼくは、帰ってくると、すぐにご飯にして、その日にあったことを話しながら、楽しく晩ご飯を食べていました。ぼくは、野球をやっていました。試合の時は応援しに来てくれていました。時には、けんかもしたけれど、ぼくにとって大切なおばあちゃんでした。

人の命って何なのでしょうか。ぼくは、「おばあちゃんの死」という、本当に辛い体験から、そのことを真剣に考えさせられ

ました。「人の命の重さは、何物にも代えられない」という言葉を聞いたことがありますが、まさにそのとおりです。

毎日元気に学校へ行き、友達と笑ったりけんかしたり…。勉強がめんどうくさいこともあるけれど、一生懸命机に向かったり…。家族と食事をしながら学校のことを話したり…。そんなあたりまえのことが、ある日突然消えてなくなってしまったのです。津波はすべてをうばいました。数え切れない人の命も…。一人一人の人に、これからの人生があったのです。夢や将来もあったのです。あたりまえで平凡な毎日も…あったはずです。

今、被災地はまだまだ大変な状況にあります。家族がまだ行方不明の人もいます。電気などが復旧していない所もあります。学校で勉強できない人たちもいます。ぼくは、勉強なんかしたくない、などという言葉を聞くと、腹が立ちます。みなさんは、いつも一緒に勉強している友達が、ある日、突然津波にさらわれて消えてしまう現実を想像することができますか。毎日、あたりまえのようにみんなで勉強したり、部活をしたりしていることが、どれほど幸せなことか…。

ぼくのおばあちゃんは、もう二度と帰ってきません。どんなに辛くてもどんなに願っても帰っては来ないのです。おばあちゃんは、自分の命と引きかえに、ぼくに大切なことを教えてくれたのかもしれません。

ぼくは、将来、野球の選手になりたいです。初めは不安だらけの中学校生活でしたが、友達ができ、部活動も頑張っています。おばあちゃんの分も、生きることを奪われてしまった友達の分も生きていきます。何があっても負けずに、友達を大切にして、一日一日を本当に悔いのないように生きていきます。

天国のおばあちゃん、これからもぼくを見守ってね。

（生徒の作文より）

目次に戻る

9　メリー・ウィドウ・セレクション

先生のタクトが振り下ろされる。私たちの最後のコンクール曲「メリー・ウィドウ・セレクション」が始まった。私の心の中には、たくさんの思いがあふれてきた。

私は、吹奏楽部の部長として、みんなが楽しく部活動に来られるように、そして演奏が上達するように、自分なりに考え一生懸命やってきたつもりだ。

部長になって四か月が経ち、少しずつ自覚が出てきた頃、あの地震が起こった。三月十一日、東日本大震災だ。私たちが住む加須市には、原子力発電所の事故で避難を余儀なくされた福島県双葉町の方々が避難してくることになり、私たちが通う騎西中学校に中学生七十一人が、新入学・転入学してくることになった。そして私たちは、地元中学校の吹奏楽部として、バスで避難してくる双葉町の方々の歓迎セレモニーに参加することになったのである。しかし、移動にかかる時間やバスの到着時刻などから取りやめとなってしまった。取りやめとなったことは残念だったが、私は、自分たちのまち加須市が、避難してくる人たちのために動いている。そのことがなんだかうれしかった。

中学三年生となった始業式の日、私たちのクラスは双葉中学校から五人の転入生を迎えた。そして吹奏楽部には、双葉中からの生徒五人が新たに加わった。双葉中の吹奏楽部は、相双地区大会で金賞を取り、毎年、福島県大会にも出場するほどの部だった。双葉中の人たちに比べると、音の出し方一つとっても、自分たちの演奏はとても未熟に思えた。これまで自分たちなりに頑張ってきたつもりなのに。今までのやり方がすべて否定されているようにさえ感じた。急に部員が増えて楽器が足りず、思うように練習ができない。そして、自分の演奏にさえ自信がもてない。劣等感を感じはじめた私は、部活動に行くのが苦痛になっていた。私は部長として、部員に指示を出さなければならない。どうしたらよいか分からなかった。

楽器が足りず十分な活動ができないでいたとき、東部地区の吹奏楽連盟の方々が、地域の中学校や高校の吹奏楽部に、楽器の貸し出しやリードなどの消耗品を寄付してくれるよう呼びかけてくださった。すると、たくさんの学校から寄付が届いた。私は寄付していただいた山のような品々を見て涙があふれた。その中には、「私にはこれだけしかできませんが・・・・・」という手紙を添えたリードが一本入った封筒もあった。それらを見て、吹奏楽を心から愛する本当の仲間がいるということを知り、とても心強かった。

ある日、顧問の先生から提案があった。それは、双葉町の方々の避難所になっている旧騎西高校で演奏会を開くというものだった。私たちは、故郷を離れ避難所で不自由な生活をされている人たちに、少しでも元気を出してもらいたいと思い準備に取りかかった。私たちは心のこもった演奏をしたいと思い、今までにないほど練習に力が入った。

当日は、「元気に笑顔で」を目標に精一杯の演奏をした。双葉町の方々に、加須市を第二の故郷だと思っていただけるようにとの願いを最後の曲「ふるさと」に込めた。聞いてくださっ

ている人たちは泣いていた。普段、元気に見える双葉町の方々が、実は辛いたいへんな思いを抱えているということを痛感した。

この演奏会をきっかけに、双葉、加須という区別はなくなり、騎西中学校吹奏楽部として一つになれたような気がした。双葉中の人たちは、「今年のコンクールも今までどおり、双葉中のメンバーで県大会を目指して頑張っているはずだったのに・・・・・」という悔しさをもっていたかもしれない。しかし、その気持ちを表に出さず、騎西中学校吹奏楽部の一員として、よりよい演奏を目指して意見を出し合い、練習に取り組んでいた。そして、中学校生活最後のコンクールに向けて、心を一つに練習に練習を重ねてきた。

コンクールを目前にしたミーティングで、双葉中の女子から、同じパートだった先輩が津波に流され亡くなったことを聞いた。その女子は、先輩の気持ちを背負ってステージに立とうとしていた。改めて、今この瞬間、このメンバーでできる限りの演奏をしようとみんなで心に誓い合った。

先生のタクトが止まり、騎西高校の中庭に割れるような拍手が響いた。やりきったという達成感と満足感。そして心の底から感謝の気持ちが湧き上がってきた。楽器を貸してくださった人たち、消耗品を寄付してくださった人たち、私たちの活動を支えてくださった多くの人たちに、自分たちは皆さんのお陰で納得のいく最高の演奏をすることができましたと伝えたい気持ちになった。いろいろなことがあったけれど、このメンバーで活動できて本当によかったと心から思えた。

そうした吹奏楽部の活動に対して、地域社会に貢献する青少年を全国規模で応援している団体から「ボランティア・スピリット・アワード」というすばらしい賞をいただいた。しかし、私たちは特別なことをしたとは思っていない。双葉中の人たちと一つになってよい演奏をしたい。多くの人たちに私たちの演奏を聴いてもらいたいと思っただけだ。楽器などを貸し出したり寄付していただき、避難してきた方々に演奏を聴いてもらうことができたこと、そして多くの人たちに感謝する気持ちをもてたことがこの賞につながったのだと思う。

今、私は思っている。たくさんの人たちからいただいた温かな心を、私もまたたくさんの人たちに感謝の気持ちを込めて分けてあげたい。それによって、たくさんの人たちが元気になってくれたら、それが自分自身の喜びであり、次に進むエネルギーになるのだから。

（生徒の作文より）

目次に戻る

10　語り継がれる教訓

陸前高田市は、岩手県南東部の太平洋に面した三陸海岸の南寄りに位置する都市である。三陸海岸南部はリアス式海岸が続き、西の唐桑半島と東の広田半島に挟まれた広田湾の北奥に陸前高田の小さな平野が広がる。山と海に恵まれた美しい街ではあるが、明治、大正、昭和それぞれの時代ごとに大きな地震による津波の被害に遭っている。そこで、この地域の学校では、火災、地震による避難訓練の他に、津波による避難訓練を必ず行っており、小学校の時から、『地震が来たら、高台に逃げろ！』という言葉が代々語り継がれて来たのだ。

そして、時代は平成へと移り変わり、その教訓が試される時が来てしまった…。

これは、当時、岩手県立高田高校二年生だった熊野翔太さんの話である。

平成二十三年三月十一日午後二時四十六分、突然大地震が起きた。地面を大きく揺るがし、家も倒さんばかりに揺れに揺れ、立っていることさえできない状況だった。ぼくは、友達と街のスーパーに出かけていた。ただならぬ状況を感じたぼくたち三人は、早速、周りの人たちに「高台に逃げてください。」と声をかけながら、急いで高台に避難した。ところが、高台に避難している人は予想以上に少なかったのである。

ぼくの携帯電話に親友からのメールが届いた。

「そっちは、だいじょうぶか。」

ぼくの頭の中には、『地震が来たら、高台に逃げろ！』という言葉がよぎる。半信半疑ではあるが、これは大変なことになるかもしれないと感じた。先ほどの揺れで、友達の一人がガラスで手を切り出血していた。ぼくは、もう一人の友達にティッシュを渡し、けがをみてやってくれと頼むと、制服の上着とバッグを預け、街に引き返した。

「高台に逃げろ！、高台に逃げろ！」

ぼくが叫び続けても、街の人々はまだ状況が分からず、

「津波なんか、ここまで来るはずがないよ。」

と逃げる気配すら見せなかった。

とにかくぼくは、

「津波が来る、早く高台に逃げて！」

と、商店街のありとあらゆる人に叫びながら走り回った。

ちょうどそこに、同級生の蒲生さんのお母さんが働いている美容院があった。

「早く高台へ逃げてください。」

蒲生さんは、大きな地震の揺れで散乱した店内の片付けに追われていた。

「こんなところでもたもたしていてはだめです。早く高台に逃げてください！」

焦る気持ちを抑えながら、再度、蒲生さんに伝えると、また街中へと飛び出し、あらん限りの力を振り絞って叫び続けた。

その時である。前方に土煙が見えた。そして、今までに聞いたこともない、いろいろな物を押し出してくるような不気味な音が聞こえた。

「津波が来た！」
津波は速かった。あっという間に迫ってきた。もう高台まで逃げるのはとても間に合わない。そう感じた時、建物の中から大きな声が耳に飛び込んできた。
「早く、こっちへ入れ！」
ぼくは、その建物の中にすべり込んだ。
「上がれ！」
その声にひかれて駆け上った、そこにはすでに多くの人たちが避難していた。窓を見ると、水位がどんどん上昇してくる。
「もっと上はないんですか！」
ぼくが聞いてみると、屋根裏部屋があることが分かり、避難していた十二人は、そこへ移ることにした。ちょうどぼくが上っている時だった。
「ドーン、バリバリ、ザアー。」
津波が濁流となって飛び込んできた。大きな力で引き裂くような勢いだった。ぼくの片足が濁流に吸い込まれそうになったが、辛うじて脱出することができた。しかし、ぼくの下にいた人たちは…。しばらくすると、今度は水が引き始めた。その引き波がまたがれきを運ぶ。多くの人達が濁流にのみ込まれて行く中で、ぼくたち六人は、寒さと飢えと恐怖に震えながら一夜を過ごした。

翌日の午前十時、ぼくたちは自衛隊のヘリコプターに救助された。地面に足が付いた時、ぼくは、はじめて自分が生きていることを実感することができた。
下ろされた場所から何とか歩き、避難所となっている学校の体育館に到着した。避難所には、たくさんの人が集まっていた。そのざわめきは、皆が、ぼくが生きていたことを驚いているようにさえ感じられた。
すると、向こうの方から、ぼくを呼ぶ声が聞こえた。
「熊野君、生きていてくれたの…。あなたが『早く、高台に逃げて！』と知らせてくれたお陰で、今のわたしがあるのよ。」
あの美容院で働いていた蒲生さんだった。泣きじゃくりながらぼくに声をかけてきた。
「ああ、よかった…。蒲生さんも生きていたんだ。よかった。
本当によかった…。」
しかし、ぼくは素直に喜ぶことができなかった。家族は生きているのか、友達は無事なのか、不安な気持ちの方が強かったからだ。しばらくすると、お父さんが迎えに来てくれた。ぼくが生きていることを喜ぶお父さんを見て、張りつめていた空気から一気に開放され、ぼくの目から涙があふれた。

時が経って少し落ち着いてきた頃、高校に集まるようにという連絡が入った。級友に会えることがとても嬉しく思えた。
体育館に集まると、校長先生からお話があり、そこで、亡くなった生徒、行方不明の生徒の名前が発表された。
「…○○、…○○、…○○、…。」
「えっ…。」
その中に、地震が起きたときにぼくにメールをくれた親友の名前があったのだ。信じられなかった。ぼくは、彼が避難しているものだとばかり思い込んでいたのだ。もう一度、彼からのメールを見た。
「そっちは、だいじょうぶか。」

あの時、ぼくが彼に「高台へ逃げろ！」とメールを返していたら、助かっていたのではないかと思うと、今でもやり切れない思いで胸がいっぱいになる。ぼくは、代々語り継がれてきた『地震が来たら、高台に逃げろ！』というこの教訓の重みを知った。そして、これからも、この教訓を語り継いでいかなくてはならないと心に誓った。

目次に戻る

11　極限の救出劇

ズズズ・・・

と大地に伝わる不気味な振動。その直後にグラグラッと来た大きな揺れ。

森闘志也（もりとしや）さん（三十四歳）は、自分の勤務する釜石市の新日鉄釜石製鉄所で地震に遭遇した。森さんは大きく、長く続く揺れに（今までにない地震だ！）と感じたが、どうすることもできず、身を潜めて、構内で様子をうかがった。三月十一日の午後のことである。

きしむような鈍い音、避難を告げるサイレン、機械の操作を止める音、今までと一変した緊張感が構内を包む。森さんは、状況を判断し、急いで同僚と外に避難した。他の人たちも揺れの止まるのを待って高台へと避難を始めていた。会社は、海から約一キロ離れた場所にある。森さんもただ事ではないことを直感していた。（どんなことになるのだろう…。）予測できない不安が頭の中をよぎった。

外に出てみると会社の近くの甲子川（かっしがわ）の水が、猛烈な勢いで海に引いていく。その水の動きを見て森さんは、津波の前兆であることを察知した。津波が来る。一刻も早く高台に避難しなければ津波に飲みこまれてしまう。待ったなしの時間と命を懸けた戦いである。一秒でも早く、一センチでも高い場所に避難できるかどうかで生死が分かれる…。森さんの頭の中はこのことだけがグルグルと駆け回っていた。（津波が来る。）と予感した瞬間である。

国道二八三号線に出て避難所に行こうと走り出した森さんの見たもの。それは、避難しようとする車の長蛇の列。車は渋滞で遅々として進んでいない。このままでは車ごと一遍に津波に飲み込まれてしまう。悪魔の手はもう海からきているかも知れない。

「車を降りて逃げろ！」

「自分の足で走れ！」

森さんは車に向かって必死に叫んだ。しかし、窓の閉められた車内にその声は届かない。気づかない人もいる。森さんはさらに訴え続けた。森さんのただならぬ様子に気づいた人々は車を道路の端に寄せて走り出した。

「子どもの手を離さず、少しでも上に！　早く、早く！」

走り出した人々の背中に向かって森さんは何度も叫び続けた。そして、近くの車に向かっても次々と呼びかけて行った。

その時である。津波の第一波は、国道を濁流の大河となって押し寄せてきた。海に近い下の方にあった車は、あっという間に津波に飲み込まれていった。森さんの目の前には、汚泥に浸かった車が何台も並んでいた。そして、車中に閉じ込められた人たちは脱出しようするが、車のドアは濁流の水圧で開かない。「ガシャン！」生か、死か、見かねた森さんは、自ら濁流の中を歩き出し、急いで車に走り寄ると、車の窓ガラスを素手で割った。「早く！」と割れた窓から手をさしのべ、閉じ込められた人を抱きかかえるように救い出した。「ガシャン！」、「早く！」その繰り返しで一人また一人と五人の命を助け出すことができた。お礼を言う人に「いいから、逃げろ！」と叫んだ。車から車を回ろうとした。

と、次の瞬間、森さんの背後から第二波の津波が押し寄せて来た。森さんの一七四センチメートルの体はあっという間に濁流の中に消えていった。油ぎった海水、悪臭、体に当たるがれき。泥水に沈んでいく中で、森さんは、自分がどちらの方向に流されているのかさえも分からなかった。いや自分がどうなる

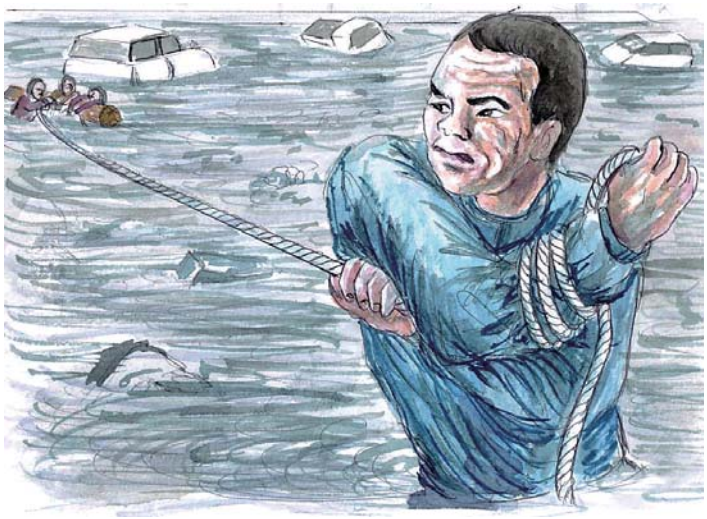
のかも分からない。海やプールの水の流れと全く異質な泥水のうねりの中で何とかしなければと必死で手足を動かそうとするが、着ている服は水を含み、重さを増している。水の勢いも増して思うように手足も動かない。流され沈んでいく濁流の中で森さんは津波の力のすごさを感じた。その時である。「ドスン」鈍い音とともに森さんの体は、何かにぶつかった。水に沈んだ道路のフェンスである。（何とかなるか！）わらにもすがる思いでフェンスにしがみつき、夢中でかけあがった。九死に一生を得るとはこのことだ。「生きている。助かった。」森さんは、ずぶぬれの疲れた体で命のあることに感謝した。

「はぁ、はぁ。」荒い呼吸を整えながら一命を取り留めた森さんが構内に戻ると、国道の向こう側に車内に取り残されている女性三人がいるのが見えた。その近くでは、男性一人が浮きつ沈みつ漂流している。濁流の大河と化した国道の向こう側に渡り、対岸の丘まで登らないと助けられない。（助けに行くには遠すぎる距離だ…。）その場の状況から考えた森さんであったが、（目の前で死にかけている人がいるのにそのままにしておくことはできない。）と、とっさに判断した。森さんは、構内にあったロープを小脇に抱えて濁流に飛び込み、押し寄せる波を対岸まで必死に泳ぎ切った。まるで、大河を渡る獅子のように。

対岸にたどりついた森さんはまず、近くで漂流していた男性を泳いで救助。次いで、取り残された車にいた女性には浮いていた丸太につかまるよう指示した。それを確認すると思い切りロープを投げ込み、しっかり握りしめるよう指示。女性たちの握りしめたロープを森さんは、慎重に、慎重に手繰（たぐ）り寄せた。

「大丈夫だ。あきらめるな。」

手繰り寄せるロープに渾身の力を込めた。少しでも力を弱めると自分がまた濁流に引きずり込まれる。女性たちの水にぬれた衣服も重い。波の勢いもある。しかし、（このまま自分が引きずりこまれてしまったら…。家族や同僚を悲しませてしまう。助けられた人も心に重荷を背負う。こんなところで死ねるか。）森さんは足をふんばり、歯を食いしばり、引っ張るロープに力をこめた。あと五メートル、あと三メートル。森さんと濁流の対決である。やっとの思いで引き寄せ、三人の命も救われた。脱力していく森さんの体を粉雪が舞う。



森さんは、直接的、間接的に多くの命を救った。しかし、未曾有の惨劇に直面し、もっと助けたかったという思いはつのる。

多くの命を救った森闘志也さんは埼玉県出身。埼玉の高校で高校ジャパンに選ばれたラガーマン。大学三年の時、父親が交通事故で重傷を負い、人間の命や健康がどれほど大事かは森さん自身がよく知っている。一九九八年、新日鉄釜石入り。センターとして三十歳までプレーした。この極限の中の救助劇は彼のラグビーで培った体力と精神力のたまものである。

釜石港の輸送管理センターが森さんの職場、海がフィールドだ。

「また、この海で活躍したい。」

と、森さんは、傷だらけの顔で前を向いて生きる。

目次に戻る

12　天使の声

「おはようございます。今日も寒くなりそうですね。」
その日も明るく元気な未希さんの声が宮城県南三陸町役場の危機管理課に響いた。誰にも気さくに接し、職場の仲間からは「未希さん」と慕われていた遠藤未希さん。その名には、未来に希望をもって生きてほしいと親の願いが込められていた。
妹をひとり持つ未希さんは、地元で就職を望む両親の思いをくみ、四年前に今の職場に就いた。九月には結婚式を挙げる予定であった。

突然、ドドーンという地響きとともに庁舎の天井が右に左に大きく揺れ始め、棚の書類が一斉に落ちた。
「地震だ！」
誰もが飛ばされまいと必死に机にしがみついた。庁舎は騒然とした空気に包まれた。それはかつて誰も経験したことのない強い揺れであった。未希さんは、（すぐ放送を）と思った。
はやる気持ちを抑え、未希さんは二階にある放送室に駆け込んだ。昨春配属された危機管理課で未希さんは防災無線を担当していた。すぐに地震の情報は放送室に届けられた。
「震度七、津波の大きさ六メートル。」
未希さんは揺れる中、何とか防災無線のマイクの前に立った。（落ち着かなくては）と、大きくひと呼吸して・・・。
「大津波警報が発令されました。町民の皆さんは早く高台に避難してください。海岸付近には、絶対に近づかないでください。」
いつもと変わらない未希さんの声が町中に流れた。
海岸から約五百メートルの位置にある三階建ての防災対策庁舎は阪神・淡路大震災を機に建設され、震度七にも耐えられる鉄骨組の建屋であった。
地震直後に入った津波予想は高さ六メートル。町の防潮水門は五・五メートルである。（六メートルなら大丈夫。万が一、波が水門を越えても屋上に逃げればいい。）
それは職員誰もが同じ思いであった。
「大津波警報が発令されました。町民の皆さんは早く、早く、高台に避難してください。」
未希さんは、同僚の三浦さんと交代しながら祈る思いで放送を続けた。

地震が発生して二十分、すでに屋上には三十人ほどの職員が上がっていた。すると突然かん高い声がした。
「潮が引き始めたぞぉー。」
その声は二階の放送室にも届いた。（えっ、潮が引き始めた？津波がくる！）未希さんの頭の中は混乱していた。（いや、一人も犠牲者を出してはいけない。）未希さんはあせる気持ちを抑えながら三浦さんと放送を続けた。
午後三時十五分、屋上から、
「津波が来たぞぉー。」

という叫び声が聞こえた。未希さんは両手でマイクを握りしめて立ち上がった。そして、必死の思いで言い続けた。
「大きい津波が来ています。早く、早く、早く高台に逃げてください。早く高台に逃げてください。早く高台に逃げてください・・・。」
「逃げろ！　逃げろ！　早く逃げろ・・・。」
隣で叫ぶ三浦さんの声が一段と大きくなった。重なり合う二人の声が絶叫の声と変わっていた。
津波は見る見るうちに黒くその姿を変え、鎌首のように頭をもたげ、グウォーンと不気味な音を立てながら、すさまじい勢いで防潮水門を軽々越えてきた。そして、大量のがれきを押しながら次々と建物を壊し、黄色い土ぼこりをあげながら、容赦なく町をのみ込んでいく。信じられない光景であった。
「ばかな！、こんなはずはない・・・。」
誰もがそう思った。しかし、もう逃げるところはなかった。
血相を変えて放送室に飛び込んできた職員がいた。
「このままじゃ、やられちゃう。ここも危ない。みんな、早く屋上に逃げろ、早く、早く！」
未希さんを始め、職員は一斉に席を立ち、屋上に続く外階段を駆け上がった。そのとき、
「来たぞぉー、山側に顔を向けろー、絶対に手を離すなー。」と、野太い声が聞こえてきた。と、その瞬間、津波は、「ゴウォーン」とすさまじい音を立てて、庁舎の屋上をも一気に襲いかかってきた。それは一瞬の出来事であった。
猛烈な波に押し流されてしまった人、流されまいと手すりを必死の思いでつかむ人、アンテナにしがみつき、かろうじて水面から顔を出している人、フェンスにつかまり助けを求める人、そこはまさに生死を分けた泥水の渦巻く惨状となった。

時間にして三分は経ったのだろうか。波は少しずつ引いていった。
「おーい、大丈夫かぁー。」
「あぁー、あー・・・。」
力のない声が聞こえた。三十人ほどいた職員の数は、わずか十人であった。しかしそこに、あの未希さんの姿は消えていた。
それを伝え知った母親の美恵子さんは、いつ娘が帰ってきてもいいようにと未希さんの部屋を片づけ、待ち続けていた。
未希さんの遺体が見つかったのは、それから四十三日目の四月二十三日のことであった。
五月四日、しめやかに葬儀が行われた。会場に駆けつけた町民は口々に、
「あの時の女性の声で無我夢中で高台に逃げた。あの声で背中を押された。あの放送がなければ今頃は自分は生きていなかっただろう・・・。」
と、涙を流しながら未希さんを惜しみ、写真に手を合わせた。
変わり果てた娘を前に両親は、無念さを押し殺しながら、
「生きていてほしかった・・・。本当にご苦労様・・・、ありがとう。」
とつぶやいた。
出棺の時、雨も降っていないのに、西の空にひとすじの虹が出た。未希さんの声は、「天使の声」として町民の心に深く刻まれている。

目次に戻る

わたしは、今、目標に向かって、
走り続けています。
昨日よりも今日、今日よりも明日、
わずかな成長をよろこびにかえて、
今日も走り続けています。
苦しいときもあります。
あきらめたくなるときもあります。
でも、負けない自分がいます。
応援してくれる仲間がいます。
みんなに支えられているのです。
感謝の気持ちを忘れずに、
これからも走り続けます。

埼玉県職員　市民ランナー　川内優輝

目次に戻る

日本に届け、この思い！　～世界中からの応援メッセージ～

東日本大震災直後、２０以上の国や地域、国際機関が緊急支援に駆けつけてくれました。また、１６０を超える国や地域、国際機関から義援金や物資の提供がありました。さらに、被災された人々に対し、多くの国や地域から数多くの温かい励ましの声、復興への応援メッセージが寄せられています。

これらのメッセージには、国際協力機構（ＪＩＣＡ）が事務局を務めている国際緊急援助隊や青年海外協力隊など、これまでに日本が、貧困や災害に苦しむ世界の人々への支援を行ってきた「国際協力」への御礼の気持ちが込められているものもありました。

メッセージや支援を届けてくれた国や地域の中には、経済的にも苦しい状況にある国やこれまで日本ではあまり知られていない国も含まれています。

世界中の人々の思いが、“心の絆”となって、日本に希望と勇気を与えてくれています。

ＪＩＣＡに寄せられた被災地への応援メッセージや活動の例（写真提供：JICA）

セルビア（欧州）

日本へのエールを込めて、人々が赤と白の布をまとい「人間日の丸」を作りました。

中華人民共和国（アジア）

「日本の被災地のお友だちが、幼稚園に行けるようになって、住むところも、着るものも、おもちゃもあるよう、お祈りしています。僕のお小遣いがみんなに幸せを届けますように。そして、みんなの生活がはやくもとにもどりますように。」

＊このメッセージをくれた洪くん（６歳）はお小遣いを寄付として持ってきてくれました。

ケニア（アフリカ）

日本のＮＧＯとＪＩＣＡの協力で井戸の建設を行った地域の小学校の子どもたちと先生から、応援のメッセージが届きました。「がんばって！日本」

パラグアイ（南米）

戦後、東北地方から日本人が移住したパラグアイでは、日系農家が生産する大豆を使った豆腐を日本に届けるというアイデアが生まれました。

参考：●外務省　http : //www.mofa.go.jp/
●日本に寄せられた世界各国・地域等からの支援　http : //www.mofa.go.jp/mofaj/saigai/
●独立行政法人国際協力機構（ＪＩＣＡ）　http : //www.jica.go.jp/
●ＪＩＣＡに寄せられた世界の国や地域からの応援メッセージ
http : //www.jica.go.jp/information/disaster_msg/

目次に戻る

1　ぼくにできること（小学校低学年）

1　**主題名**　いざというときのために　　内容項目　1－(1)
2　**ねらい**　健康や安全な生活について見直し、よく考えて行動しようとする態度を育てる。
3　**展開例**

	学習活動と主な発問	指導上の留意点
導入	1　地震や火事などの災害が突然学校や家庭で起きたときのことを考える。	・災害の恐ろしさやその時に何をしたのかを想起させ、本時のねらいへの方向付けをする。
展開	2　資料を読んで話し合う。 (1)　地震が起きて水が出なくなってしまったとき、ぼくは、どんなことが心配になりましたか。	・当たり前のように蛇口をひねれば出る水が出なくなってしまうと生活に困ってしまう気持ちに共感させる。
	(2)　みんなが出かけているときに地震が起きたら、どんなことが困りますか。	・突然の災害で頼る人がいないときの心細さとともに、どのような困ることがあるのかを考えさせる。
	(3)　お父さんやお兄ちゃんの話を聞いて、ぼくはどんなことを考えたのでしょうか。	・突然の災害に対して、事前に準備しておくことや自分で考えて行動することが必要なことを押さえる。
	3　今までの自分を振り返る。 ・　困ったときに、自分で考えて行動できたことはありますか。	・迷子になったときやけがをしたときなど身近に起きたことの中から、自分で対処できた経験を発表し合い、実践意欲を高める。
終末	4　教師の体験談を聞く。	・突然の災害時に、事前の準備やきまりが役に立った話や自分で考えて行動できた話をする。

4　教材作成の意図と取扱いの留意点

本資料では、突然地震が起きたときのことを題材として取り上げている。指導に当たっては、よく考えて行動することの大切さや、事前に準備しておくと危険を最小限に食い止められることなどに気付くことができるようにする。また、地震のときだけではなく、起こり得る危険な場面を考え、健康で安全な生活を心がけていけるようにする。

低学年という発達の段階を踏まえると、いたずらに震災の写真や映像を見せて恐怖心をあおるようなことがないように配慮する必要がある。

2　だいじなおかしも（小学校低学年）

1　**主題名**　みんながまもる　　内容項目　4－(1)
2　**ねらい**　自分のことばかり考えずに、みんなで約束やきまりを守ろうとする態度を育てる。
3　**展開例**

	学習活動と主な発問	指導上の留意点
導入	1　みんなの生活の中にはどんなきまりがあるか考えて発表する。	・本時の学習の話題になる「きまり」について関心をもたせ、話合いの方向付けをする。
展開	2　資料を読んで話し合う。 (1)　避難訓練を始めるという放送を聞いて、校庭のけんくんは、どんなことを考えているのでしょうか。	・訓練の必要性や大切さを考えず、ドッジボールをやりたがっているけんくんの気持ちに共感させる。 ・校庭の真ん中に向かうゆうかさんとけんくんの気持ちを対比して考えさせる。
	(2)　避難訓練での校長先生の話を聞いて、けんくんは自分のことをどのように思っているのでしょうか。	・しの字のきまりを考えずに、自分たちのことだけを考えていた態度に気付かせる。
	(3)　3月11日、激しい揺れの地震の日に、けんくんはどんな気持ちで避難しているのでしょうか。	・泣きたい気持ちを抑え、おかしもを守り、校庭に避難するけんくんの思いを通してねらいに迫る。
	3　今までの自分を振り返る。 ・　きまりを守ってよかったことはありますか。	・これまでの経験を想起させ、きまりを守って生活することの大切さを押さえる。
終末	4　教師の説話を聞く。	・管理職などの協力により説話の効果を上げることもできる。

4　**教材作成の意図と取扱いの留意点**

本資料では、避難訓練という具体的な行為を指導するのではなく、訓練の意義や参加する態度などを考えさせることを通して、約束やきまりを守ることの大切さに気付かせることが重要である。低学年の発達の段階を考慮して、１学年後期以降に活用することが適当である。児童によっては、東日本大震災という未曾有の大地震に対して大きな不安を抱くことも考えられるので、震災の写真や映像などの扱いは、児童の実態に応じて、提示の有無を含めて配慮する必要がある。

3　スーパーの店先で（小学校中学年）

1　**主題名**　困っている人への思いやり　　内容項目　2－(2)
2　**ねらい**　相手の気持ちや立場を考えて、進んで親切にしようとする心情を育てる。
3　**展開例**

	学習活動と主な発問	指導上の留意点
導入	1　東日本大震災の影響で、物が自由に買えなくなった状況を振り返る。	・直接大きな被害を受けなかった場所でも水やガソリンなどが不足し、買い求める長蛇の列ができたことを知らせ、資料への関心を高める。
展開	2　資料を読んで話し合う。 (1)　お母さんから募金を勧められたのにできなかったのは、ぼくのどんな気持ちからでしょうか。	・募金をすることの恥ずかしさやとまどいについて共感させる。
	(2)　困っている男の人を見たとき、ぼくはどんなことを考えていたのでしょうか。	・全てのお客様に公平に水を買ってもらおうとする店員と、被災地に１本でも多くの水を届けたいという男の人それぞれの立場や気持ちを考え、葛藤する心をとらえる。
	(3)　男の人を見送りながら、ぼくはどんな気持ちになったのでしょうか。	・自分の気持ちを伝えられたことへの満足感とともに心が温かくなる心境を押さえる。
	3　今までの自分を振り返る。 ・　相手の立場や気持ちを考えて、親切にできたことや親切にされたことはありますか。	・生活の中で親切にしたときやされたときの気持ちを想起させ、思いやりの気持ちの大切さを実感させる。
終末	4　教師の説話を聞く。	・テレビや新聞の報道等から、震災時の思いやりに関するエピソードを紹介する。

4　**教材作成の意図と取扱いの留意点**

相手の身になって考え、心情を共感的に受け止め理解することは、豊かな人間関係を築いていく上で基本となる大切なことである。東日本大震災においては、直接支援活動を行った人だけではなく、世界中の人々の善意の気持ちが募金やメッセージなどという形になって被災地に届いた。本資料は、震災などの募金への協力を促すものではなく、相手を思いやる優しい気持ちが自分の心の中にあることを確かめ、他者に向けて積極的に実践していこうとする意欲を育てることが重要である。

4　おにぎりとおみそしる（小学校中学年）

1　**主題名**　当たり前の食事に感謝　　内容項目　2－(4)
2　**ねらい**　わたしたちの生活を支えてくれるすべての人たちに感謝しようとする心情を育てる。
3　**展開例**

	学習活動と主な発問	指導上の留意点
導入	1　海苔が巻かれていない小さなおにぎりと具のないお味噌汁の絵を見て感じたことを発表する。	・これが震災後の避難時の一食分の質素な食事であることを押さえ、資料への関心を高める。
展開	2　資料を読んで話し合う。 (1)　何日間も、おにぎりとおみそしるを食べていたわたしは、どんな気持ちだったのでしょうか。	・毎日同じ物で、今までに比べるとおいしくないという気持ちと、食べるものがあることだけでも嬉しいという気持ちの両方に共感させる。
	(2)　梅干しの入ったおにぎりや野菜のおかずが付いたご飯を見たとき、どんな気持ちになったのでしょうか。	・おかずが付いて嬉しい気持ちと、本当に食べていいのかという複雑な気持ちをとらえさせる。
	(3)　笑ってご飯を食べているわたしは、どのようなことを考えているのでしょうか。	・当たり前のような生活が送れることの嬉しさとともに、ご飯を作ってくれた人や生活を助けてくれた人への感謝の気持ちを押さえる。
	3　今までの自分を振り返る。 ・　みなさんの生活はどのような人に支えられていますか。	・自分の生活を支えてくれている人に目が向けられるようにする。
終末	4　教師の説話を聞く。	・自分の生活を支えてくれている様々な人へ感謝の気持ちを広げられるようにする。

4　教材作成の意図と取扱いの留意点

本児童作文は、埼玉県で実施した平成23年度「食をめぐる作文」の最優秀作品である。
私たちの日常生活は、不自由なく過ごせることが多いことから、生活を支えている人たちの存在や苦労に気付かないことも少なくない。そこで、本資料を通して日常生活を見つめ直し、日々の生活がたくさんの人々の支えによって成り立っていることを認識させるとともに、人々への尊敬や感謝の気持ちを育むことが大切である。併せて、物を粗末にせずに大切にしようとする心を育み、公共心へとつなげていくこともできる。

5　凛ちゃんの願い（小学校中学年）

1　**主題名**　大切な命　　内容項目　3－(1)

2　**ねらい**　身近な人の死から、生命の尊さを理解し、生命あるものすべてを大切にしようとする心情を育てる。

3　**展開例**

	学習活動と主な発問	指導上の留意点
導入	1　3月11日の東日本大震災のことを思い出し、東北地方の被害の様子を知る。	・東北地方が地震や津波で被害を受けた写真から、被害の大きさを知らせる。
展開	2　資料を読んで話し合う。 (1)　転校してきた凛ちゃんは、どんな気持ちだったのでしょうか。 (2)　お母さんのお話から、ひいおじいちゃんの死を知った凛ちゃんは、どんな気持ちだったのでしょうか。 (3)　埼玉県の学校で、凛ちゃんはどんな気持ちで過ごしているのでしょうか。 3　今までの自分を振り返る。 ・　生きていることのすばらしさとは、どんなことでしょうか。	・明るく活発でがんばりやである凛ちゃんの元気がない様子をとらえる。 ・宮城県で震災に遭い、自分が味わった恐怖とともに、ひいおじいちゃんの死という悲しく辛い体験をした凛ちゃんの気持ちを考えさせる。 ・ひいおじいちゃんの死を受け止め、前向きに生きようとする凛ちゃんの気持ちを考えさせる。 ・残されたひいおばあちゃんへの思いも考えさせる。 ・3月11日の震災の様子や日常の生活を振り返り、自分の生命の尊さを感じるとともに前向きに生きることの大切さについて考えさせる。
終末	4　教師の説話を聞く。	・事故や病気で突然身近な人が生命を失うこともあることなどに触れながら、生命を大切にし、精一杯生きていこうとする意欲が高められるようにする。

4　**教材作成の意図と取扱いの留意点**

本資料は当該児童の保護者の協力によって作成されたものである。生々しい事実を伝えている資料なだけに、被災者の子どもが学級にいる場合など、悲しい思いを想起させてしまわないように配慮することが必要である。本資料を通して、生命の有限性と尊さに気付かせるとともに、身近な人の死を受け止め、見守られているという思いから、今を精一杯生きていこうとする心情を育むことが大切である。

6　こいのぼりに思いをこめて（小学校高学年）

1　**主題名**　温かい心で　　内容項目　2－(2)
2　**ねらい**　思いやりの心をもち、相手の立場に立って親切にしようとする態度を育てる。
3　**展開例**

	学習活動と主な発問	指導上の留意点
導入	1　遠方に住んでいる人に親切にしたり親切にされたりした経験を思い出し、その時の気持ちを振り返る。	・遠方に住んでいる祖父母や、転校した友達に手紙を書いたり、電話をしたり、プレゼントを贈ったりしたときの気持ちを思い出させる。
展開	2　資料を読んで話し合う。	・田野畑村の位置を確認し、友好都市、山村留学の意味を説明する。
	(1)　津波で家や車や漁船が流されている画面を見ながら、大輔はどんなことを考えたのでしょうか。	・昨年仲良しになった田野畑小学校の友達や親切にしていただいた村の人達のことを心配する大輔の気持ちに共感させる。
	(2)　大輔はどんなことを思いながら、赤い大きなこいのぼりを選び、応援メッセージを書いたのでしょうか。	・募金をしたが、さらに、遠方に住む被災した友達のことを思い、赤い大きなこいのぼりにたくした大輔の思いや願いを考えさせる。
	(3)　こいのぼりの下を笑顔で元気よく走る田野畑小学校の子どもたちの姿を見て、大輔はどんな気持ちになったのでしょうか。	・田野畑小学校から届いたビデオレターを見て、遠く離れていても気持ちが通じ合えたことの喜びを押さえる。
	3　今までの自分を振り返る。 ・　自分の思いやりの気持ちをどのように伝えたことがありますか。	・表情や言葉、態度や行動など、いろいろな伝え方があることに気付かせ、積極的に伝えようとする意欲を高める。
終末	4　教師の説話を聞く。	・教師や児童の身近な出来事から、思いやりのある行為を紹介し、学級に広げられるようにする。

4　教材作成の意図と取扱いの留意点

毎年、交流学習を実施している埼玉県深谷市と岩手県田野畑村。東日本大震災によって、心を通わせた友達が住んでいる田野畑村も大きな被害を受けた。その友達や村の人々を思いながら取り組んだ主人公の行為を通して、相手の立場や気持ちを考えることが大切であること、その思いは伝わることに気付かせ、温かい心で親切にしようとする態度を育てていくことが大切である。

7　思いをのせたランドセル（小学校高学年）

1　**主題名**　思いを届ける　　内容項目　2－(2)
2　**ねらい**　だれに対しても思いやりの心をもって親切にし、相手の役に立とうとする心情を育てる。
3　**展開例**

	学習活動と主な発問	指導上の留意点
導入	1　親切にされた経験を振り返る。	・親切にされたときの経験を発表し合い、温かな雰囲気の中で、ねらいとする道徳的価値への方向付けをする。
展開	2　資料を読んで話し合う。 (1)　ゆれる蛍光灯のひもを見つめる昌平は、どんな気持ちだったのでしょうか。	・震災で大きな被害を被った人々へ十分に思いを馳せさせる。
	(2)　お父さんの言葉や校長先生の言葉が気になっているときの昌平は、どんな気持ちだったのでしょうか。	・「ぼくに何ができるだろうか。」「ぼくにも何か役に立てないか。」と、戸惑いながらも一途に考える昌平に共感させる。
	(3)　ランドセルをみがいているときの昌平は、どんなことを思っていたのでしょうか。	・大切に使ってきた昌平のランドセルが、もう一度役に立つんだという喜びに満ちている気持ちをとらえる。
	(4)　昌平が「ランドセルにのせた思い」とは、どんな思いだったのでしょうか。	・児童なりの「復旧・復興」への思いや願いを考える。同情ではなく、共感的な感情の高まりとして押さえる。
	3　今までの自分を振り返る。 ・　今までの自分は、いつでもどんなときでも相手を思いやり、相手の役に立てないかと考え親切にしていただろうか。	・親切な行為の原動力は、困っている相手への思いやりであることに気付かせ、相手の役に立とうとする意欲を育てる。
終末	4　ことわざを聞く。 「親切は、社会を結び付けている絆である。」	・思いやりや親切は、人として生きる社会を結び付ける絆であることを押さえる。

4　**教材作成の意図と取扱いの留意点**

本資料は、実際に避難を余儀なくされた児童を受け入れた小学校の卒業生の行動をもとに作成したもので、当時、児童が自分にできることを一生懸命に考え、精一杯の思いや願いを込めてランドセルを贈ったという内容である。「なんだ、使い古しじゃないか。」と考えてしまうことも予想されるが、磨き込んだランドセルは、新品に負けない輝きを放っている。指導に当たっては、今、自分なりにできることを見付け、これを実践した児童の心根を理解させ、困っている人に対して積極的に親切にしていこうとする意欲を高めることが大切である。

8　命、今生きていること（中学校・高等学校）

1　**主題名**　命、今生きていること　　内容項目　3－(1)

2　**ねらい**　人間の生命の有限性やかけがえのなさを理解し、夢や希望をもって前向きに生きようとする態度を育てる。

3　**展開例**

	学習活動と主な発問	指導上の留意点
導入	1　大きな津波に家や車、漁船などがのみ込まれて行く様子を見て話し合う。	・津波の映像や写真等から、一瞬のうちに建物が破壊されたり、生命を奪われたりしたことを知らせる。
展開	2　資料を読んで話し合う。 (1)　ぼくは、津波に一瞬にしてのみ込まれ、二度と帰ってこないおばあちゃんのことを、どんな気持ちで受け止めているのでしょうか。	・楽しく食事をしたり、学校の話をしたり、笑ったり、けんかをしたりする当たり前の生活こそが、生命そのものだと気付いた主人公の気持ちに共感させる。
	(2)　「ぼくは、勉強なんかしたくないなどという言葉を聞くと、腹が立ちます。」という言葉に、ぼくのどんな気持ちが込められているのでしょうか。	・津波にさらわれた祖母や友達が、今ある生命を大切にし、精一杯生きることを教えてくれたのでは、と気付いた主人公の気持ちをとらえる。
	(3)　天国にいるおばあちゃんに、ぼくは今、どんなことを伝えたいと思っているのでしょうか。	・自分を支えてくれた祖母に感謝の念をもちながら、祖母の思いを胸に、これからよりよい生き方をしていこうとする気持ちを話し合わせる。
	3　今までの自分を振り返る。	・「いつも一緒に勉強している友達が、家族が、愛犬が、ある日突然津波にさらわれて消えてしまう現実を想像できますか。」の問いかけに対する答えを考えさせる。
終末	4　教師の説話を聞く。	・「心のノート」（中学校）P84や生命について考えさせる文献等の言葉を紹介し、前向きに生きていこうとする意欲を高める。

4　**教材作成の意図と取扱いの留意点**

本資料は、「青少年健全育成深谷市民大会中学生の主張」で発表された生徒作文である。

大好きな祖母が、大きな津波にのみ込まれて一瞬のうちに生命を失い、故郷を後にして転校してきた主人公。指導に当たっては、生命に限りがあること、これまで支えてくれたことへの感謝の念、そして、祖母の思いを胸に自分の生き方についてより深く考えることを通して、限りある生命を精一杯生きようとする態度を育てることが大切である。

9　メリー・ウィドウ・セレクション（中学校・高等学校）

1　**主題名**　感謝の気持ちを伝えたい　　内容項目　2－(6)

2　**ねらい**　多くの人々の善意や支えにより日々の生活が成り立っていることに感謝し、自分もこたえていこうとする心情を育てる。

3　**展開例**

	学習活動と主な発問	指導上の留意点
導入	1　埼玉県でも多くの被災者を受け入れていることを知る。	・福島県双葉町から旧騎西高校へ町ごと避難してきた状況をつかませる。
展開	2　資料を読んで話し合う。 (1)　双葉中学校からの部員を迎え、吹奏楽部の部長としてどんな気持ちになったのでしょうか。	・演奏への劣等感や部長としての重圧に苦悩する私の気持ちに共感させる。
	(2)　旧騎西高校での演奏会や中学校最後のコンクールに向けて、私はどのような気持ちで練習をしていたのでしょうか。	・吹奏楽を愛する仲間や、不自由な生活を余儀なくされている被災者、吹奏楽部員の思いを感じながら、演奏に打ち込もうとする私の気持ちをとらえる。
	(3)　コンクールでの演奏を終え、私はどんなことを考えたのでしょうか。	・演奏を支えてくれたすべての人々に感謝するとともに、自分もその気持ちを分けてあげたいという強い思いを押さえる。
	3　今までの自分を振り返る。 ・　あなたの心には、どのような感謝の気持ちがありますか。	・生徒の身近な生活の中から、感謝したい人や出来事を想起させ、その気持ちにこたえようとする意欲を高める。
終末	4　「心のノート」（中学校）P64「気づいていますか、ありがたい心の贈り物に…」を黙読する。	・互いの助け合いや協力を支えているのは感謝の心であることを印象付ける。

4　**教材作成の意図と取扱いの留意点**

本資料は、被災者を受け入れる側の心境をとらえた生徒作文である。直接大きな被害を受けなかった者として、想像することもできないくらい、辛く、悲しく、困難を克服しようとしている被災者とどのように接したらいいのか、また、部長としての責任の重さも含め、悩みながらも答えを見つけていく過程を考えることは、中学生という発達の段階にとって今後に生かされる重要な学習となる。特に、本資料では、復興に向けて多くの人が一つになろうとする“心の絆”を感じ取り、感謝の念を抱くとともに、その気持ちを素直に表現し、相手の心に届け、潤いのある人間関係を築いていこうとする意欲を育むことが大切である。

10　語り継がれる教訓（中学校・高等学校）

1　**主題名**　かけがえのない生命　　内容項目　3－(1)
2　**ねらい**　かけがえのない自他の生命を大切にしようとする心情を育てる。
3　**展開例**

	学習活動と主な発問	指導上の留意点
導入	1　岩手県の三陸海岸の様子を知る。	・岩手県の地形を地図で見せながら、時代ごとに津波の被害を受けている地域の様子を理解させる。
展開	2　資料を読んで話し合う。 (1)　「津波が来る、早く高台に逃げて。」と叫びながら走り回った熊野さんは、どんな気持ちでいたのでしょう。 (2)　6人で一夜を過ごす熊野さんは、どんなことを考えていたのでしょうか。 (3)　蒲生さんに泣きながら御礼を言われた時、熊野さんは、どんな気持ちになったのでしょうか。 (4)　友達のメールを見ながら、熊野さんは教訓について、どんな思いでいるのでしょうか。	・主人公をそこまで駆り立たせた思いは何であったのかを考えさせる。 ・これまでに起きたことやこれからのことを考え、生命について向き合う主人公の心境をとらえる。 ・避難してくれてよかったという思いと、家族や友人を心配する複雑な気持ちに共感させる。 ・生死が紙一重であることを実感し、自分の命とともに、相手と一緒にいるこの時間を大切にしながら生きていこうとする思いを感じ取らせる。 ・教訓の重みについて考える。
終末	3　本時の学習を振り返る。 ・　熊野さんが危険を顧みずに行動できた原点はどこにあるのでしょうか。	・即行動に移せる実行力、勇気、自他の生命を尊重する心など、主人公の相手を思う気持ちの強さをとらえさせる。

4　**教材作成の意図と取扱いの留意点**

本資料は、2011年９月13日の読売新聞にも取り上げられたものである。東日本大震災では、運命やとっさの判断によって生死が左右されたこともあった。しかし、日頃の備えや危険を想定して行動することで命を守ることもできる。本資料では、代々語り継がれてきた教訓が市民の生命を守るものであることを再認識させるとともに、それを実行した熊野さんの思い、震災で生かされた生命や失った生命の尊さを感じ取りながら、今、生きているこの時間や自他の生命を大切にして生きていこうとする心情を育てることが重要である。

11　極限の救出劇（中学校・高等学校）

1　**主題名**　かけがえのない生命　　内容項目　3－(1)
2　**ねらい**　生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を大切にしようとする心情を育てる。
3　**展開例**

	学習活動と主な発問	指導上の留意点
導入	1　東日本大震災の緊迫した状況を想起する。	・映像や写真等を提示し、緊迫した状況をつかませ、資料への関心を高める。
展開	2　資料を読んで話し合う。 (1)　車に向かって呼びかけ、ガラスを素手で割って助け出す森さんは、どのような思いだったのでしょうか。	・周囲の状況を十分把握させた上で、主人公の考え方や行動を支えたものを追求していく。 ・緊迫した状況を押さえた上で、主人公の必死な思いをとらえさせる。
	(2)　九死に一生を得たずぶ濡れの体の森さんは、どのような気持ちだったのでしょうか。	・津波にのまれながらも命があることに対する感謝の気持ちに共感できるように丁寧に扱う。
	(3)　国道の向こう側に取り残された人たちを見た森さんは、どんなことを考えたのでしょうか。	・自分の体力の限界、濁流と化した国道、対岸の丘までの距離などを押さえ、葛藤する主人公の考えと瞬時にそれを乗り越えた考えは何かを掘り下げていく。
	(4)　渾身の力でロープを引き寄せる森さんはどんな思いだったのでしょうか。	・足をふんばり、歯をくいしばる主人公の姿などから、主人公を支えている思いを浮き彫りにしていく。
	3　今までの自分を振り返る。 ・　森さんをここまで駆り立てたものは、どんな考えがあったからでしょうか。	・主人公の全体を貫いていた生き方はどんなものであったかを確認し合い、生命の重さやかけがえのなさについて考えさせる。
終末	4　生命を尊重する生き方についてまとめる。	・感動を一層心に刻むよう留意し、自分の命に対する考えを深めていく。

4　**教材作成の意図と取扱いの留意点**

東日本大震災では、多くの人が人命救助に貢献した。埼玉県出身の森闘志也さんもその一人であり、決死の救助は、2011年４月18日の岩手日報にも取り上げられた。決して真似のできることではない。窮地に立たされた森さん自身のとっさの判断から、このような行為に及んだと考えられる。このことから、自分を犠牲にして他者を救うことを強いるような指導にならないことに配慮する必要がある。津波から市民を次々に救助した森さんの根底にあった考えとは何かを資料の場面に即して追求していき、かけがえのない自他の生命を尊重しようとする心情を育てていくことが大切である。

12　天使の声（中学校・高等学校）

1　**主題名**　人間としての気高さ　　内容項目　3－(3)

2　**ねらい**　人間がもつ心の強さや気高さに触れ、自分に恥じない誇りある生き方をしていこうとする心情を育てる。

3　**展開例**

	学習活動と主な発問	指導上の留意点
導入	1　防災無線の役割について考える。	・これまでに聞いたことのある無線の内容を想起し、役割について考えさせ、資料への関心を高める。
展開	2　資料を読んで話し合う。 (1)　津波が迫る中で放送をし続ける遠藤さんは、どんな思いでいるのでしょうか。	・自分の職務に対する使命感や責任感から、一人でも多くの町民を助けたいという思いを感じ取らせる。
	(2)　葬儀に駆けつけた町民は、どのような思いでいるのでしょうか。	・放送があったからこそ生き延びることができたことを振り返る町民の遠藤さんへの感謝と敬意の気持ちを押さえる。
	(3)　変わり果てた娘を目の前にして、両親はどんな気持ちでいるのでしょうか。	・多くの町民の生命が救われても、娘の生命は戻ってこないという深い悲しみと、職務を全うした娘を労う気持ちをとらえる。
	3　人間としての誇りについて考える。	・だれかが見ていようと見ていまいと、自分に恥じない生き方とは何かを考えさせる。また、心の強さや気高さが少なからず自分の中にもあることを感じ取らせる。
終末	4　教師の説話を聞く。	・震災では、一人でも多くの生命を救うために命がけで任務を遂行した方々がいたことを押さえ、その気高い行いに敬意を表す。

4　**教材作成の意図と取扱いの留意点**

人間だれもが、誘惑に負けたり、易きものに流れたりするなどの弱さをもっている。その反面、相手を思いやる優しさをもち、夢や目標に向かって努力するなどの強い心ももっている。本資料は、自分の命を犠牲にして他者の命を救うことを肯定するような指導にならないことに配慮しながら、遠藤未希さんの行為を通して、任務に対する使命感や責任感、すべての人への愛情とも言える他者への思いやりなど、人間としての誇り、心の強さや気高さに焦点を当てて指導できるようにする。また、両親の思いなどを取り上げながら、かけがえのない生命の大切さについてもしっかりと押さえる。

道徳教育の推進を図るために

◆要　因　規範意識やモラルの低下　努力、忍耐の精神の欠如　家庭の教育力の低下

◆子どもたちの課題　・暴力行為　・いじめ　・不登校　・自殺　・万引きなど

子どもたちの規範意識を高め、豊かな心をはぐくむ道徳教育の推進

平成２１年度

校長の道徳教育の方針

新学習指導要領
先行実施

道徳教育推進教師を中心とした組織づくり

道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うもの

平成２２年度

要となる道徳の時間の充実

「彩の国の道徳」

○郷土の偉人や伝統文化、「規律ある態度」、情報モラルや公共マナー等を題材とした豊富な教材

他の教育活動との関連

「彩の国の道徳」実践事例集

○「彩の国の道徳」を活用した道徳の時間と他の教育活動との関連を例示
○教員の指導力の向上を図るための資料

平成２３年度

学校・家庭・地域が一体となった道徳教育の推進（道徳教育ムーブメント）

《保護者や地域の人》

知る
- 学校だより
- 学校ＨＰなどの充実

参加する
- 道徳授業公開
- 保護者説明会などの実施

ともに考える
- 保護者参加型の授業
- 学級懇談会などでの話題

みんなで育てる
- ＰＴＡ
- 学校応援団などとの協力

家庭・地域との連携

家庭用「彩の国の道徳」

○子どもの成長を記録できる書き込み資料
○親子で話し合える読み物資料
○子育てに役立つコラム

学校教育や家庭教育の充実

夢や目標に向かってたくましく生きることができる子どもたちを育てる

埼玉県独自の道徳教育資料集

埼玉県道徳教育教材資料集「彩の国の道徳」【Ａ４版】
平成２２年２月（小学校・中学校用）・平成２２年３月（高等学校用）作成

「彩の国の道徳」実践事例集【Ａ４版】
平成２３年１月作成

家庭用「彩の国の道徳」【Ａ５版】
平成２３年３月作成

埼玉県教育委員会　生徒指導課ホームページ　http://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/s08/

平成二十三年度　埼玉県道徳教育教材資料作成委員会委員及び協力者

作成委員

鈴木　賢一	元鴻巣市立鴻巣中央小学校長（委員長）
山西　　実	元春日部市立春日部中学校長（副委員長）
浅田　俊夫	前さいたま市立南浦和小学校長
小渕　雄司	前鴻巣市立鴻巣南小学校長
貴志　祐子	富士見市立針ケ谷小学校長
関口　良子	前深谷市立桜ヶ丘小学校長
関根　克巳	東松山市立市の川小学校長
武正　和己	加須市立騎西中学校長
野口　松雄	元川口市立元郷小学校長
山田　　武	前熊谷市立玉井小学校長

児童生徒作文

常盤　桃花	ふじみ野市立上野台小学校
渡辺　真輝	深谷市立川本中学校
木﨑　春菜	加須市立騎西中学校

協　力

川内　優輝	県立春日部高等学校主事
清水　　勉	深谷市立幡羅中学校長（写真）
岡村　和美	北部教育事務所指導主事（挿絵）

事務局

県立学校部生徒指導課長	山﨑　達也
県立学校部生徒指導課副課長	吉野　龍男
県立学校部生徒指導課主幹	佐藤　直樹
県立学校部生徒指導課主査	新井　晴人
県立学校部生徒指導課指導主事	田部井　洋
県立学校部生徒指導課指導主事	浅見　哲也

「彩の国の道徳『心の絆』」　平成二十四年三月発行
発行　埼玉県教育委員会
編集　埼玉県教育局県立学校部生徒指導課
〒三三〇―九三〇一
さいたま市浦和区高砂三―一五―一
電　話　〇四八―八三〇―六七四五
ＦＡＸ　〇四八―八三〇―四九五二
ＨＰ　http://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/s08/